

「だけ、ばかり」の用法

森田良行

I 問題の提起

「だけ」は「ばかり」とともに限定を表わす助詞として意味を共通にする部分がある。しかし、相互に入れ替えの可能な同一文脈でありながら、「だけ」を用いるか「ばかり」を用いるかで意味上差を生じる場合がある。「だけ」と「ばかり」の間には類似点と相違点とが認められ、それぞれの意味特徴は両者を対比することによって、より一層理解され得るはずである。ところで、過去の辞書文典類の中で、この両語を比較対比して説いたものはあんがい多くない。たとえば、松下大三郎「標準日本口語法」(昭和5)、佐久間鼎「現代日本語法の研究」(昭和15)などにその説明が見られるが、両助詞の意味特徴の違いを、用例分析による調査報告として示していない。

筆者はかつて「ぐらい、ほど、ばかり」の3語を、その用法と意味との両面にわたって調査し、本紀要第7集にその結果を報告した。(「ぐらい、ほど、ばかり」の用法?参照)その際、特に「ばかり」は「だけ」との対比において調査する必要を痛感した。本稿は、その後採集した「だけ」の用例を、前稿「ぐらい、ほど、ばかり」の調査に対応させて整理し、先の調査結果に突き合わせてみたものである。したがって、調査目的、資料収集のテキスト、調査分析の方法等はすべて前稿の研究方式を踏襲した。

II 「だけ、ばかり」の調査

1. 調査資料

主として大正・昭和の短編小説から採集したが、さらに語学教育研究所

の外国人学生用日本語教科書・中級(第 I 部～第 III 部)からの用例を加えて資料の充実をはかった。採集用例数は、だけ 374 例、ばかり 396 例であるが、「ばかり」の用例は前稿の調査資料をそのまま用いた。

2. 調査事項

語の意味、特に付属語の個別の意味は、その語がそのとき果す文法機能と密接な関係があるとの観点から、「くらい、ほど、ばかり」の調査のときと同様、次の 2 点を重点的に調査した。

その 1 は、採集用例がそれぞれいかなる品詞の語に後接しているか、「だけ、ばかり」の文法的特質を先行語(または先行句)との関係から調査する。その 2 は、「だけ、ばかり」を伴う句が文の成分としてどのような働きをなしているか、「だけ、ばかり」の文法的特質を、それを含む叙述全体との関係から調査する。以上の 2 点を調査整理したものが、4～5 ページに掲げた表である。

3. 表の説明

前稿「くらい、ほど、ばかり」の用法」に掲げた表との対比を考え、項目の配列順、記載方法などはすべてこれに準じている。したがって細目については当該項目の語明を参照されたい。ここでは表の理解に必要な説明にとどめておく。

A. 表の縦らん①～②の意味分類ならびにその配列順は、前稿の「ばかり」の分類配列を骨子とし、そこに「だけ」の意味分類を突き合わせたものである。これは前稿で触れたように、多くの辞書や文法書に見られる意味分類をそのまま採用し配列したもので、したがって各分類項の比重にかなりの軽重が見られ、ものによってはより下位分類にあると思われる項目も同列に扱われている。また、分類基準の点でも、意味面重視や形式面重視など、分類の不均一さが見られるが、このような分類面での不徹底さをいちおう度外視して並べたものである。

①～②の順序は「だけ、ばかり」の先行語との接続形式を考慮においた配列で、体言に接続する形式を上位に、用言に接続する形式を下位に置く

ようにした。それゆえ①～②の各形式が主としてどんな語に接続するか、逆に言えば、どのような語に接続するとそのような意味を表わすかが、あらしわかるようになっている。

イ。表の理解のため、各項のはじめに例文を雛型として掲げた。これは1つの代表にすぎず、その分類項の意味・用法のすべてを覆い尽くすものではない。

ウ。横らんは調査事項を表わし、「名詞・人代名詞に」から「打消に」までは先行語別による調査、「主語となる」以下は「だけ、ばかり」を伴う句の、文の成分別の調査である。

エ。表中の数字は、各マス内の左側が「だけ」、右側が「ばかり」を表わす。したがって各マス内に2つずつ数字がはいるはずであるが、用例皆無の場合は、その個所が空らんとしている。

オ。マス内記載の数値は、その用法において占める割合を表示し、小数点以下は四捨五入してある。したがって1割を切る場合は、0.5以上なら1、以下のときは0と表示し、用例皆無の場合はそれと区別するため空らんとした。四捨五入の結果、総計は必ずしも10とならず、9あるいは11となる場合も多い。

なお、その項における採集用例数が極端に少ない場合(5例を切る場合)は、使用比率の正確さを期しがたいので、あえて数値を記載せず、当該個所に?を記した。(参考までに記すなら、「だけ」の用例中、②<限定>が圧倒的に多く、314例を占め、残る60例がその他の諸用法であった。)

III 「だけ、ばかり」の特色

1. 名詞・人代名詞に接続するばあい

名詞・人代名詞には「だけ、ばかり」共に接するが、その表わす意味で共通するのは②<限定>のみであり、それも表現意識にかなりの差が見られる。

いわゆる<限定>を表わすと言われる「ばかり」には、ほぼ「だけ」と置き換えのきく、あるものを他と区別する②<限定>がある。

詞に	名詞・人代名	数詞に	代名詞に	コソ	不定詞に	副詞に	用言に	文に	助詞に		打消に	主語となる	連体修となる	連用修となる	助詞を伴って	連用修となる	そのみで	述語・条件句となる
									詞に	体言+助								
2	5	10					3					0	2	1		6	0	
			10										5		5		2	
1		7	1										3	3	1		3	
1		9	1										2		5			
?		?					?						10					
							10						2	2		2	2	
						10							3			7		
						10									?	?		
						10							7		3		1	
						10							4		6			
		3				7							?		9			
							10							10				
							10						1		8		1	
							10						7				3	
							9	1							7		3	
							10						10					
								8	2		0				4	6		
2		1					5	2		0							10	
3							2	5		0							10	
5	5	1	1				3	3	0	1	0	0	2	1	12	12	3	5
	6		0				1		2	1			0	2	2	5	3	

○むかしから癖がついてあるせみか炬燵や湯たんぽばかりではたよらないといひます（谷崎潤一郎「芦刈」）

○そのためばかりではなく、こちらに来てからは（正宗白鳥「戦災者の悲しみ」）

○本社とは名ばかりの東京の事務所でありまして（豊島与志雄「白蛾」）
しかし、このような例はむしろ少なく、「だけ」と置き換えることができないか、できても意味は違ひの出してしまう場合が多い。これらは㊸く限定された事柄を何度もしきりと行なう形式として別類に扱うほうがつごうがいい。

○いつも、お新がお世話ばかりかけますもの。（舟橋聖一「篠笛」）

○小屋の閉場のまでその踊子ばかりを眺めてゐる間（北原武夫「妻」）

○肺炎になり、それがこじれて寝ついてからは痲癩ばかり起してゐた。（中野重治「鉄の話」）

また、派生形式として〈そのものみが数多く存在する〉意味を表わすもの、

○石ころと沙ばかりの河原は、不毛な沙漠であつて（阿部知二「地図」）
なども、この㊸形式に含ませる。これらの例はむりに「だけ」と置き換えると意味が変わってしまう。また、㊸の派生形式と考えられる〈限定を強調する〉形式

○お化けの登場する小説を書いていた十二歳のわたしにとっては、非常に神秘的な夢のような体験で、その時ばかりは小説より詩の方が高級だという気がした。（金井美恵子「詩と小説について私的に」朝日新聞 1969.6.6.夕刊）

○出家の身で俗世の名利榮達に齷齪する様ばかりは私にはどうも合点が行かず（長与善郎「地藏の話」）

なども「だけ」とはよほど言葉のニュアンスが違う¹。このように「ばかり」

1 強調を表わす「ばかり」は、「は」を伴って「...ばかりは...だ」の文型のとき生ずる意味で、「今度ばかりは...」のような慣用表現として現われる。

が意味面で「だけ」からはみ出る部分をそうとう持っているため、「だけ」との置き換えを許さぬ場合や、置きかえると不自然な例、意味の変わってしまう例、言葉のニュアンスが異なってしまう例が非常に多い。(「だけ」と置き換え可能な文法形態は、多く「ばかり」を含む句が主題に立つか、「ばかりでなく/ではない」と打消に呼応する場合である。)

けっきょく、意味上「だけ」とほぼ等価な「ばかり」は②<限定>のみにしぼられるのであるが、一方、②形式の「だけ」はすべて「ばかり」に置き換えが可能かという点、そうではない。意味的にほとんど等価で、置き換え可能な形態としては、

(1) 「...だけが...する」とガ主語で動詞述語をとるもの。(主語が述語動詞の行為主体となる場合にかぎる。)

○伊沢の目だけが光ってゐた。(坂口安吾「白痴」)
○大きな口もとだけが貫治らしい倅を残して力なく結ばれ(壺井栄「廊下」)

(2) 「...するのは...だけだ」と動詞叙述を準体助詞「の」や形式名詞「こと、もの、ところ」等で受け「...は...だけだ」と述語になるもの。これは(1)の倒置文である。

○今眠ることができるのは、死んだ人間とこの女だけだ。(「白痴」)
○何も知らずにみたのは私だけだったのだ。(堀辰雄「風立ちぬ」)
○目下国中にありあまってゐるものは女だけといふうはさだから(石川淳「雪のイヴ」)

(3) 「...だけではない/でなく」と打消に呼応して追加形式をなすもの。

○着物だけではない。砂糖もバターも見当らない。(堀一雄「父子来迎」)
○庭やその水溜だけではなく、部屋の中にまで入ってきた。(阿部知二「地図」)
○あたしも岩国だけではなく福岡にも尾道にも古い恋人がゐます。(井伏鱒二「集金旅行」)

以上の3形式は、意味にさほどのずれをきたさずに、「ばかり」との置き換えが可能である。

ところで、同じが主語であっても、

○この母には賛成だけが必要なのである。(丹羽文雄「鮎」)

○ニュースだけが真実なんだ! (「白痴」)

のような形容動詞述語の場合は置き換えが困難である。このことは「だけ」と「ばかり」の性質の違いを端的に表わしていると思われる。つまり「ばかり」は作用・行為・動作・存在・存続といった動詞の表わす意味を前提とした限定に用いられ¹、一方「だけ」は超時的で、体言・用言の別なく、単に事柄や事物の範囲の限定としてのみ働く²。ちなみに、連用修飾語となる「ばかり」は、筆者採集の用例ではすべて「...ばかり...する」と動詞に係る例のみであった。

「だけ/ばかり」のこのような差は、連体修飾語をなす場合についても見られる。「だけ」が「の」を伴って連体修飾語となる場合、

○枯木のないところは赤土と枯草だけのあき地の野原で (宇野浩二「枯木のある風景」)

のように修飾語(赤土と枯草)が被修飾語(あき地)の所属物で、「枯草ダケ デアルあき地 / 枯草ダケガ生エテイルあき地」と断定ないしは動詞的意味を帯びている場合にのみ「ばかり」への置き換えが可能である³。(この場

1 「ばかり」は、ある同一同類の主体がある範囲内で行なうとか、同一同類の事柄がある範囲内で行なうとか、同一同類の対象に対して行なわれるとか、また、ある同一の事物がある範囲の程度内で存在するとか、あるいはある事態に対応するのがいつも同じ人や物であるとか、いずれの場合も動詞的叙述を前提とし、「同一同類の事物」に重点をおけば限定、「ある範囲」に重点をおけば程度となる。

2 「だけ」は、ある事物を対象として取り上げるさい、その取り上げるべき範囲をはっきりとある限度で区切り、その範囲外の事物は対象外として排除し、区切られた範囲内の部分のみを取り出し問題とする。区切り、それにはずれる事物を他者として否定することに重点をおけば限定、提示された限点の極限範囲に重点をおけば程度となる。

3 かような「だけの/ばかりの」の「の」は断定の助動詞連体形ととるべきである。

合、被修飾語には具体的事物を表わす名詞がくる。)一方、

○それとも、そんな奇怪な感覚は私だけのことだらうか。(高見順「流木」)

○誰も知らないやうな、おれ達だけのものを、おれはもっと確実なものに、
もう少し形をなしたものに... (堀辰雄「風立ちぬ」)

のように所有を表わす場合は¹、「ばかり」への置き換えがきかない。(かような場合、被修飾語には具体的名詞の他に、形式名詞「こと、もの」等の立つことが多い)

{ 労働者だけの集会
労働者ばかりの集会

これなども「だけ」を用いると、(A) 使用者側をシャットアウトした労働者自身の集会とも、(B) 労働者しか出席していない集会ともとれるが、「ばかり」を用いると(B)にしか解釈できない。(A)の「の」は所有の格助詞で「労働者」に重心が置かれ「集会」は労働者の所有物となる。(B)の「の」は断定の助動詞と考えられ、後続語「集会」に重心が置かれ、「労働者」は集会の所属物となる。(A)は体言の限定であり、(B)は断定的叙述または動詞的意味を前提とした限定である。

(A)(B)の違いがもっともよく現われるのは連用修飾語をなす場合である。動詞に係ることにより両者の差が強調される。

○私はずつと直行するといふ意味のことだけ答へてをいた。(井伏鱒二「集金旅行」)

○主人は逐電した細君の悪口ばかり言ひながら息を引きとつた。(同上)

「だけ」は行為や叙述の対象の範囲を「何々ダケ」と限定する。「ばかり」は「...ばかり...スル」と行為のあり方を規定する。連用修飾語の場合、多くの文脈は「だけ/ばかり」の入れ替えが比較的可能だが²、㊶㊷形式

1 単に所有を表わす「だけの」の「の」は格助詞。

2 ○晴れた日だけ選んで、一年分の馬草を刈る(石坂洋次郎「草を刈る娘」)

○入棺を済ませ、釘は打たなかったが、蓋だけのせた。(堀一雄「父子来迎」)

「晴れた日」のような多数選択の可能な場合は「ばかり」への置き換えができるが、「棺の蓋」のような1枚かぎりのものには、それができないのは当然であろう。

間の移行として意味に相違が出てくる。

(松下大三郎)「だけ」は範囲を限定してその一部を単独に抜ひ、事柄の関係する所がその一部以外に出てない意を表す。「ばかり」もそうであるが、其の上に、事柄が専ら其物に関係する意を含む。されど「ばかり」は「専ら」「頻に」「度々」「沢山」「甚しく」等の意を帯びる。(標準日本語法 357~8 ページ)と述べ、佐久間鼎が「だけ」はある限度に至るまでを含めて、その限度を超えないといふところに意味をもたせます。「ばかり」はそれ以外のものを除いて特に資格のあるものを取上げていた態度を示します。(現代日本語法の研究 393 ページ)

と述べているのも「だけ」「ばかり」のかような機能差をとらえているものと思うが、かような語性の違いは ⑩⑪ 形式の特に連用修飾語となる場合に強調されることをことわっておく必要がある。⑩⑪ 形式の「だけ」が「名詞・代名詞に続く形式」としては「限定」の他に ②④⑨⑩がある。いずれも「ばかり」への置き換えはきかない。⑨⑩は「⑨⑩ (身分・事情・能力に相応して) 形式」の特色は「⑨⑩ だけに / ためだけあって」と条件句を形成する点にある。両形式の相違は意味的なもので、⑨は「⑨⑩ (身分・事情・能力) に相応して / ためだけあって」

○ことに自分が大阪もだけに、大阪人を非常にいやがったもんや。(宇野浩二「枯木のある風景」)

と、前件で事実を述べ、後件で事実から当然生ずべき結果が述べられる。「…サノデ、ナオサラ」「…デアルカラ、サオノコト」という意味関係を構成する。⑩は「⑩ (身分・事情・能力) に相応して / ためだけあって」

○それにしても百貨店というだけあって何でもそろっていますね。(I 27)

○停車時間にプラットホームでかきこむそばの味は、さすが本場だけあって格別だ。(I 44)

1 作者・作品名を記していない用例は、早大語研「外国学生用日本語教科書・中級」(旧版)から採ったものである。ローマ数字は第 I 部~第 III 部を表わし、アラビア数字はページを示す。

のように、後件で事実が述べられ、その事実が当然生ずべき理由づけが前件に来る。「ヤハリ...ダカラ」という意味関係を構成する。両形式の差は純粋に意味的なもので、形態的には⑱は⑳の一類と考えるべきだろう。

⑱形式...だけに

⑳形式...だけに / だけあって / だけある

○一年の三分の一を写生旅行につひやすといはれるほどの勉強家だけに (=ダゲアッテ)、その下がきの早さは熟練した職人のやうであった。(「枯木のある風景」)

○百年もの歴史をもった労働者の町だけに (=ダゲアッテ)、身分の上下というものがない。(III 25)

○さすが長男だけある。(湯沢幸吉郎「口語法精説」)

名詞・人代名詞に「だけに」の続く形は⑳<限定>形式にも見られる。しかし、これは、動作行為の対象、方向、存在、帰着点等を表わす格助詞「に」を伴って目的語をなし、「...だけ・に・話す / 聞かせる / 行く / いる / なる」等の動詞で受けている(そのため「...に・だけ」と入れ替えが可能である)点、⑱⑳とは文論的に相違が認められる。

②④⑤の各形式は、先に示した表からもわかるように、本来②は数詞に、④⑤は指示語に接続する形式である。名詞に付くといっても、どんな名詞にでも付くわけではない。②<その数量に相当する程度>は

○一方で1000円だけ得をした人があるからには、他方で必ずそれと同額だけの損をした人がなければならない。(I 50)

のように数量概念をもつ名詞(同額、同量、等量、差額など)に付いて「...相当ノ」の意味を帯びさせる。④<程合いの限度>は

1 体言に続く場合は「だけに」に限られるが、用言に続く場合は、次の例のように「に」の落ちた形もまれに見られる。

○今の会社に這入ってまだ十年にならないのに早くも営業係長の要路に用ひられ社長や重役から珍しい才物だと言はれてゐるだけ、同僚や下のものにはあまり受のまい方とは言はれない。(永井荷風「腕くらべ」)

○こんなささやかなもののだけで私達がこれほどまで満足してみられるのは
（「風立ちぬ」）

のように、容量、幅、度合い等の程度概念を指示する「...なもの/...
なこと」の形式名詞に続いたとき生ずる意味あいでは、「...ナモノ程度デ」
の意味を表わす。これは「...ナモノノミデ」の〈限定〉ともとれるわけ
である。実質概念の名詞に続けば、はっきり限定④となる。

⑤〈程度の強調〉は、程度を強調する基準として何かを引き合いに出
し、「ソレト同等、モシクハソレニ近イ程度ホドノ」の意識を表わす。

○私がお前さんだけの容色まじようがあればと頻に借しがって意見をす。（「腕く
らべ」）

「これだけの.../それだけの...」と指示語を受ける場合に較べると、
〈強調〉意識よりは〈程度の基準〉意識のほうが強い。

2. 数詞に接続するばあい

「だけ」も「ばかり」も数詞に続くが、意味に違いがある。「ばかり」が
数量を表わす語に付くと、

○紋つきを着た男女が五十人ばかり鍵の手に坐り（井伏鱒二「集金旅行」）

「ぐらい、ほど」と置き換えのきく、①〈おおよその数量〉を表わす。
ばくせんと数量の幅を推測する気持ちである。一方「だけ」は、

○返事をよこしたのは一箇月分滞納の三名だけで（「集金旅行」）

と、はっきり数量を限る④〈限定〉で、「のみ」に通ずる。もっとも、「数
詞+だけ」でも、その数の量や幅を問題とする場合、

○もう三十秒、もう三十秒だけ待たう。（坂口安吾「白痴」）

○その独身の産婦人科医に、二千元だけ持たして明日にでも届けさせる
（「集金旅行」）

「30秒だけ/2000円だけ」という時間や金額は、「1秒、2秒、3秒...」
と単位的なもので計って行って、それを30秒という数値の線で区切り、②
〈そこが許されるぎりぎりの限界であって、それ以上ではない〉という意
識の上に立っている。（この点は「ぐらい、ほど、ばかり」と似た発想で、

意味は変わるが、相互に入れ替えのきく文脈である.)

○あたりはもう二人だけの世界であった。(石坂洋次郎「草を刈る娘」)
 のように、「他人」と「2人」とを対比し、意識的に他者を排して「2人のみ」を取り出し示す単純な㉑<限定>とは意識に違いがある。前者㉑形式は、数量を内なる単位で計り、その限界点を「ココマデ」と限定し、それ以上を切り捨てる意識である。後者㉒形式は、ある1つの種類・事物・グループと外なる他者との境界線を画然と区切り、他を排して「コレヲノミ」と限定する意識である。数詞であっても人数を計り数える気持ちはない。(それゆえ㉒形式の文脈は「ばかり」と入れ替えを許さぬ。)この形式は、人数を表わす場合が圧倒的に多く、それもほとんど「ひとり」(=独り、自己)か「ふたり」(夫婦、恋人同士、話し手と聞き手など)のとき用いられる。それに対し、先の㉑形式は比較的高い数値の数詞に付き、しかも、そのみで連用修飾語に立つ場合に現われる意味においてである。両者は別類とすべきであろう。

		年 月	距 離	個 人	個 回	金 額	面 積	容 積					
		時 間	長 さ	所 数	数 数	数 額	類 積	量					
ばかり	①	おおよその数量(ぐらい, ほど)		◎	○	○	△	△	△	△	△	△	△
だけ	②	その数量に相当する程度		△								○	
	㉑	限定(のみ)									◎	○	

(◎ は用例きわめて多, ○ はやや多, △ は少数)

3. 指示語に接続するばあい

「ばかり」は不定詞には付きにくい。「だけ」は不定詞にも指示代名詞にも続くが、どちらに付いても意味面で別類とせねばならぬほどの差は認められない。ここでは、コソアドに続く形を一括して考える。

「だけ」が指示語に続く場合、意味上「ばかり」と重なるのは㉒<限定>形式のみである。「ばかり」は指示語に続くともっぱら㉑㉒の<限定>と

なるからである¹。この〈限定〉形式の特徴は、名詞に接続する場合と同じなので、説明を省く(例(14))。以下、本論の中心となる「だけ」の用法を、

「だけ」特有の形式²としては、④⑤⑥⑫⑬の諸形式があるが、このうち統計的に見て、指示語に続くのが本来と考えられるのは④⑤⑥の各形式である。この3形式は「ぐらい/ほど」との対比によって得られる区別である(例(15)参照)。以下、これら3形式の用法を、

④〈程合いの限度〉は

○これだけのことで夫婦が眼に角を立ててゐるのがをかしくなった。(壺井栄「廊下」)

○あらゆる大人もそれだけで、或ひはむしろそれ以下で、(坂口安吾「白痴」)

○どれだけか経って、遅ればせの会葬者が、…(丹羽文雄「鮎」)

と、評価の基準を問題とし、一定レベルの基準点を特にとりあげ示す意識で、これは「ぐらい」の表現意識と一致する。(事実この④形式は「ぐらい」との置き換えが可能な文脈である。)なお、最初の例は連体修飾語ゆえ「ばかり」の⑥〈最低の程度〉形式「～っばかり/っばかりし」との置き換えも可能で、「っっぽち」と同様〈軽視〉の気持ちが加わる。

⑤〈程度の強調〉は

○針金にはさんでグルグルとひねることを考えついただけで、これだけの大成功が生まれたのである。(I 54)

○俺にはそれだけの度胸はない。(「白痴」)

○あれだけ榮耀榮華をしても不品行なうはさをきいたこともないので、(「芦刈」)

○どれだけ長い針金でもさげられるかというと、そうはいかない。(III 37)

「こんな/そんな/あんな/どんな(に)」に当たり、度合いの限界を驚嘆の気持ちで眺め強調する意識で、「ほど」の意識と一致する。「…だけ…のに/…だけ…でも/…だけ…ていながら/…だけ…も

1 「～っばかり/っばかりし」と音変化を起こす形式は除外する。

ない」等の特殊な表現形式と呼応する場合が多い。

⑥〈事柄に相応する程度〉は

○私は幾らか重荷をおろした感じで、同時にそれだけの重荷の重量は彼女に切迫し転移したらしい。（「集金旅行」）

のように、先行叙述の内容を「それ」と指示して「ソレ相応ノ / ソレナリノ」の意を添える。「ぐらい、ほど」との置き換えはできない。先行叙述を前提として成り立つ意味あいでは、「だけ」を用いた部分のみに限って眺めれば、⑤形式と区別はつきにくい。

○お道楽でやらせるわけにはいきません。それだけのものを身につけて、いざといふ時には、女一人の身すぎ世すぎになるもんでなくっちゃねえ。（舟橋聖一「篠笛」）

⑤「ソレホドノ」ではなく、⑥「ソレナリノ」の意味である。句や文の範囲を越え、文章論的見地に立ってのはじめて把握できる意味である。④⑤⑥の各形式は、表わす意味によって区別され得る分類形式で、その意味あいは前後の文脈によって決まってくる。「ぐらい、ほど」との置き換えの可否は結果的判断でしかない。

○なまじ義理だてをしてくれるとあの人もわたしもそれだけ苦しまなければならぬ。（「芦刈」）

「義理だてをしてくれると、ソレ相応ニ / ソレナリニ」と解釈すれば⑥形式であるが、先行叙述の内容を「状態の絶えざる変化」と動的に解釈すれば、「義理だてをしてくれるニツレテ / …ニ従ッテ」と⑫〈比例〉にとれる。これは

○父が不愉快な顔をすれば、それだけ自分も不愉快な顔をする方だった。（志賀直哉「和解」）

「…すれば、それだけ…になる」と「～と」や「～ば」の条件句を受けて連用修飾語をなすとき生ずる意味である。連体修飾語「…すれば、それだけの…がある」では、むしろ⑥〈事柄に相応する程度〉をとるべきである。⑫〈比例〉は本来、用言に付くとき生ずる形式ゆえ動詞的文

脈のときに、また、⑥は名詞的文脈のときに生ずる意味で、本質的には両者に差はない。

⑱〈身分・事情・能力に相応して〉は名詞に続く場合とまったく同じである。ただ、注意しておきたいことは、

○KはIよりも、もう半里以上も上^{かみ}であった。それだけに一層不便であった。(佐藤春夫「お絹とその兄弟」)

と指示語を受ける形は⑲〈ダケニ〉形式にのみ存在し、⑳〈ダケアッテ〉形式にはない。㉑は前件で理由づけをなすのであるから、指示語のような具体性のない語は立ち得ない。「それだけあって...だ」とはふつう言わない。

4. 副詞に接続するばあい

「だけ、ばかり」とも副詞に接し得るが、その先行副詞の種類はいたって限られ、「すこし、ちょっと、わずか」等、きわめて低い程度、少ない範囲を表わす数種の副詞を数えるにすぎない。「ばかり」は

○頂上にだけ少しばかり、朝日がかつとまともに照りつけて居た。(「お絹とその兄弟」)

のように、ただばくぜんと程度の範囲を推定する言い方(㉒形式)である。「だけ」は「少しだけ残しておこう / ちょっとだけなら見てもいい」のように、対義的な「たくさん」と「少し」とを対比し、一方をしりぞけて「タクサンデハナイ、少シダケ」と範囲を画然と限った確定的な言い方(㉓形式)なのである。

「だけ」が範囲を画然と限定する意識を持つという点で、「少しだけ / ちょっとだけ / 僅かだけ」等は数量概念にもとづく形式といえる。

○わからない点がちょっとだけある。

は、10のうち1とか2という数量概念・比率概念を底に秘める。「少しばかりの失敗にめげず...」のようなく状態の程度〉とはぜんぜん違う。

{ 少しだけ待ってくれ
{ 30秒だけ待ってくれ

は本質的には違わない。その点、⑨ 副詞+ダケは② 数詞+ダケ形式の内
に含めていい。

5. 用言および文に接続するばかり

用言に付く形式は多彩である。

	だ け	ば か り
② その数量に相当する程度	○	
⑦ 例示による状態の程度		○
⑩ 行為に相当する程度	○	
⑪ 可能なかぎり、なるべく	○	
⑫ 比 例	○	
⑬~⑯ の諸形式		○
⑰~⑳ 身分・事情・能力に相応して	○	
㉑ 限 定	○	○
㉒ 限定(しきりに...する)		○

このうち「だけ、ばかり」が文脈を共通にする形式は㉑〈限定〉のみ
で、他は互に重ならない。⑦ および⑬~⑯の諸形式については前稿「ぐ
らい、ほど、ばかり」の用法(本紀要、第7集)で詳論したので、省く。⑰
~㉑形式の用法は、名詞・人代名詞に接続する場合とまったく同じなの
で、これも省く。

②〈その数量に相当する程度〉は本来、数詞に付いたとき生ずる意味で
あり、「同量、同額」等の数量概念の名詞に付くこともある点は前に述べ
た。これはまた「同じ」にも続く。

○このやうに貫治を瘦せ細らせた年月、それと同じだけの年月を夫の病氣
と膝を突き合せて(壺井栄「廊下」)

○それと同じだけのウラニウムの原子核が、それと同じ割合に燃えていっ
たとしますと、(III 20)

「同じ」は状態、性質、形状、サイズ、数量、...等種々の概念を指示し
得るが、「だけ」が続くときは必ず「同数ノ」の数量概念を指し、②形式

となる点に注意したい。

⑩〈その行為に相当する程度〉は多く

○未練もなかったが、捨てるだけの張合ひもなかった。(坂口安吾「白痴」)

○おれ達はおれ達に許されるだけのささやかな生の愉しみを味はひながら、(堀辰雄「風立ちぬ」)

○さういふ急な引繰り返り方をするだけの何物かは父にも自分にも残って
るさうな気が自分にはして居た。(志賀直哉「和解」)

○平家が源氏など一般武士層を圧倒するだけの力をもち得た基盤は (III
60)

と連体修飾語に立ち、被修飾語に事柄や抽象的な名詞、形式名詞などの来る場合生ずる意味あいである。「…スル程度ノ / …スルニ相応ナ / …スルニフサワシイ」に当たる。先行動詞が特に可能動詞や可能の助動詞を伴った場合(⑩形式)、

○和緒は池の坊の師匠の腕をもち、裏千家のこれも教へられるだけの素養がある。(丹羽文雄「鮎」)

○車が故障した場合、道路の外に車を出せるだけの余地か、余分のレーンがあつて、(III 35)

「…スルコトガデキル程度ノ」の意であるが、慣用的な言い回しとして、先行動詞を「だけ」のあとにもう1度くり返す言い方があり、「可能ナカギリ…スル」の意味に転ずる。

○幾らでも、食へるだけ食はしてやると言ったら、嘸喜んだらう。(志賀直哉「小僧の神様」)

○まあ、折角山へ来たのですから、居られるだけ居て見るやうになさいませんか? (「風立ちぬ」)

○食慾を失ひ、痩せられるだけ痩せ細り、衰へられる限り衰へ切った貫治、(「廊下」)

○三四郎はこれで言えるだけのことを言つたつもりである。(夏目漱石「三四郎」、II 89)

この形式は、希望・欲求を表わす語「ほしい」「…したい」にも見られ、「ほしだけ取りなさい」「食べたいだけ食べていい」などの言い回しを作る。さらに「できる」と結合して「できるだけ」の語を作り、「デキルカギリ」から「ナルベク」の意味へと進む。こうなるともはや「できるだけ」ではなく、一語意識である¹。

○「しっかり勉強してもらひたい」「それは出来るだけやるつもりですが。」(武者小路実篤「或る彫刻家」)

○今はせめて死んだ者に対して出来るだけの事をしてやりたかった。(「和解」)

これらの例は「デキルカギリ」と解せるが、次の例になると「デキルカギリ」とも「ナルベク」ともとれる。

○日本にある素材をできるだけ使って、生活をよりいっそう豊かにしようと心がけている。(I 30)

○どかりと廻転椅子に坐った。それから出来るだけゆっくりと煙草に火をつけた。(石川達三「深海魚」)

⑩<可能なかぎり、なるべく>は⑩の派生形式であり、⑩は<行為に相当する程度>を表わすが、行為や状態の変化に応じてその程度も変じていくような場合、たとえば

○女が軽くなっただけ、こちらが重くなっただけにちがいない。(石川淳「雪のイザ」)

のような例では、「…スルニツレテ / …ニナルニツレテ」と<変化する行為や状態に相当する程度>を表わす。これはさらに慣用的な言い回し「…スレバスルダケ / …ニナレバナルダケ」を生む。⑫<比例>である。この慣用形式は

○あせればあせるだけ彼自身の喉が締めつけられるだけであった。(佐藤春

1 このような一語意識となるのは「だけ」を含む句が連用修飾語となる場合のみで、それゆえ副詞と考えることができる。「できるだけ」の他に「なるだけ」なども。

夫「田園の憂鬱」)

「働けば働くだけもうかる / 多ければ多いだけいい / 静かなら静かなだけいい」と動詞や形容詞・形容動詞の現在未来形に付き、「ほど」との置き換えも可能である。

⑩～⑫形式は、名詞接続の項でくわしく触れたので、ここでは形容詞・形容動詞に続く場合について一言。

「だけ」が形容詞・形容動詞に付随するには、形容詞は終止連体形に、形容動詞は連体形に接続するのがふつうである。

○擲られたのが口惜しいだけではなかった。(野上弥生子「哀しき少年」)

○値段の安いだけが武器でした。(III 29)

○粗末だけで汚れは留めず、どこか清楚な趣きがありました。(豊島与志雄「白蛾」)

しかし、ときとして、「醜くだけはなりたくない。/ 厳しくだけするのが能じゃない。/ 粗末にだけはしないでおくれ。」のように連用形に続く言い方が現われる。(この言い方は、「これだけは確かだ」などと同じく⑫<限定>形式中の<強調>と考えられる。ふつう打消と呼応する。)

ところで、このような連用形接続は⑫<限定>形式にのみ現われて、その他の形式には現われない。すべて連体形接続である。

6. 助詞に接続するばあい

「だけ」が助詞を介して体言に続くときは、すべて⑫<限定>である。このうち「ばかり」との置き換えが可能なのは「助詞+だけ」を含む句が連用修飾語に立つ場合である。⑫<しきりに...する>に意味転化するが。

○素子が自分の個性にだけ立てこもって二人の距離をひらいてゆくやうなのが、(宮本百合子「広場」)

○貫治の部屋からだけ、戸の隙間からあかりが洩れてゐた。(壺井栄「廊下」)

1 連用修飾語の場合は、「厳しくするだけが→厳しくだけするのが」のように連体形接続の語序倒置と考えられる。

連用修飾語以外は「ばかり」との置き換えがきかない¹。

○自分は父とだけの不愉快な関係からさう言ふ気持まで犠牲にするのは少し馬鹿馬鹿しい気がした。(「和解」)

○自然なんぞが本当に美しいと思へるのは死んで行かうとする者の眼にだけだ。(「風立ちぬ」)

並立助詞にかぎって主語の用法をもつ²。

○裸かになった木立と、冷たい空気とだけが残ってゐた。(「風立ちぬ」)

さて、「助詞+だけ / 助詞+ばかり」は順序が入れ替わって「だけ+助詞 / ばかり+助詞」の形ともなり得る。

○その峻には頂上にだけ少しばかり、朝日がかつとまともに照りつけて居た。(「お絹とその兄弟」)

○今は、道の片側だけに、その形見の土塀がとぎれとぎれにならび、(「枯木のある風景」)

○この頃のおれは自分の仕事にばかり心を奪はれてゐる。(「風立ちぬ」)

○世間の人^は私が彫刻ばかりに心を奪はれてゐるのを怒ってゐるのです。(武者小路実篤「或る彫刻家」)

これら2様の表現はまったく等価かという、必ずしもすべての場合がそうとはかぎらない。次に、この両形式についての問題点を列挙してみる。(混乱を避けるため、「だけ」の、それも連用修飾の用法に限って考察を進める。)

(1) 2つの表現形式間で意味に明瞭な違いが生じるのは、格助詞「で」に接する「でだけ / だけで」の場合である。

A. 注射でだけなおる B. 注射だけでなおる

A「でだけ」は、‘他の方法によつたら絶対にだめ、注射によってのみなおる’の意を表わし、B「だけで」は、‘他のいろいろな方法を併用しな

1 「ばかり」が助詞に続く形は、筆者採集例ではすべて連用修飾語の用例であった。

2 「日赤からだけが頼みの綱だ。 / 札幌からだけが到着していない」など特殊例もあるが。

くとも、最低注射のみでなおよす'の意を表わす。Aは行為や作用の実行実現に必要な残された最後の方法・手段の限定(手段を表わす「...で」を「だけ」が限定している点に注意)。Bは最低限必要とする事物の限定である(先行語を限定した「...だけ」に「で」の「...ニヨッテ」が添っている点に注意)。言ってみれば、Aは方法として可能なとるべき事柄の限定。Bは最低限必要とする事物の限定である。

(2) 以上の差は「なおよす」のような自動詞に係る場合だけではない。他動詞や可能動詞(可能の助動詞の付いたものも含めて)に係るときも同様である。

A. 注射でだけなおよす B. 注射だけでなおよす

A. 注射でだけなおよせる B. 注射だけでなおよせる

(3) 「で」には手段の他に、場所、材料、共同などの用法もあるが、A Bの違いについては同じである。

(手段) A. この子は自分のはしでだけ食べる

B. 器用にナイフだけで食べてみせた

A. ロッククライミングでだけ登れる

B. あんな山は自動車だけで登れる

(場所) A. たばこはロビーでだけ吸うことを許す

B. たばこはロビーだけでなら吸ってもいい

(材料) A. 石けんは良質の油脂でだけ作れる

B. 木造家屋は木と紙だけで作ってあるようなものだ

(共同) A. 2人でだけ話せる秘密

B. 子供たちだけで食べてしまった

(4) A「でだけ」は手段方法などの事柄が実現成立するか否かの断定の限定ゆえ、個別的具体的な事実ではなく、習慣的行為や習性、真理、可能や許容といった超時的概念的表現となることが多い。

(5) 時間の「で」は意味的に A「でだけ」の言い方が困難なようである。これは断定の助動詞ととるべきであろう。(例、2週間だけで仕上げる。)

(6) また(4)の理由により、Aは、過去や完了「でだけ...した」、継続や状態「でだけ...している」の言い方が困難である。

- | | |
|-----------------------|-------|
| ○先月ひいたかぜは注射でだけ直った。 | } 不成立 |
| ○ぼくのかぜはいつも注射でだけ直っている。 | |
| ○先月ひいたかぜは売薬だけで直った。 | } 成立 |
| ○ぼくのかぜはいつも売薬だけで直っている。 | |

(7) A「でだけ」は事柄それのみに限定する言い方ゆえ、他の場合を予想することができない。それゆえ「でだけでも」表現を持たない。

○あの山は自動車でだけは登れない。(自動車以外の方法ならすべて可能なのだが)...成立

○あの山は自動車だけでも登れる....不成立

B「だけで」は本来他を予想し前提とする言い方ゆえ、「は/も」ともに可能である。

○あの山は自動車だけでは登れない....成立

○あの山は自動車だけでも登れる....成立

(8) A「...でだけ...できる」の可能表現は「ばかり」と置き換えることができない。「ばかり」の㊸くシキリニ...スル/何度モ...スル)意は、「でだけ」のような、実現可能な状態の要因をただ1つに限定する言い方と抵触するからである。可能以外の場合なら、意味に違いは生じることが、置き換えは自由である。

○自動車でばかり行ける....不成立

○自動車ばかりで行ける....成立

○自動車でばかり/ばかりで行く....成立

(9) 「で」以外の格助詞に接続する場合は、通常 AB の2形式間に意味の違いが生じない。

- | | |
|---|-----------------------|
| { | 家族にだけ知らせる / 家族だけに知らせる |
| | 母にだけは言える / 母だけには言える |

- { 子供とだけ口をきく / 子供だと口をきく
- { 日本人とだけ話せる / 日本人だと話せる
- { 賊はからめ搦手からだけ侵入した / 賊は搦手だけから侵入した
- { 非常口からだけ出られる / 非常口だけから出られる

(10) 「で」以外なら、A 形式でも「...た / ...ている / ...ていた」表現が可能。「で」以外は AB 両形式に意味の差が出ないからである。

(11) 「へ」に続く場合は、A「へだけ」は言えるが、B「だけへ」は通常「へ」が落ちて「だけ」となる。

- { 小学校へだけ行った / 小学校だけ(へ)行った¹
- { 勤務中は便所へだけ行ける / 便所だけ(へ)行ける

(12) 「を」に続く場合は、通常 A「をだけ」の「を」が落ちて「だけ」となる。B「だけを」の場合は脱落しない。ただし、可能の言い方や希望の言い方は「を」より「が」を用いる。

- { 水(を)だけ飲む / 水だけを飲む
 - { 水(を)だけ飲める / 水だけが(←を)飲める
 - { 水(を)だけ飲みたい / 水だけが(←を)飲みたい
- もっとも、「ばかり」の例で次のようなのがあった。

○教師の言葉は三分の一もきかないで下をばかりみつめてみた。(阿部知二「地図」)

(13) 引用を受ける「と」は、A「とだけ」は成立するが、B「だけと」は成立しない。

○封筒にも一郎とだけ署名してあった(「集金旅行」)

「一郎だけと...」は成り立たない。「一郎とだけ言った / 一郎だけと言った」の場合、引用部分の範囲に差が出てくるのである。

IV 「だけ、ばかり」の分類

「だけ」も「ばかり」と同様、先行語の種類によりその意味・用法上に

1 用事があるて行く移動動詞の場合は両形式可能であるが、学歴のときは「へダケ」は可能だが「ダケ」は言えないようである。

規定される面が多い。また後続叙述の形態によっても2次的規定がなされている。言ってみれば「だけ」を取り巻く文脈が「だけ」の意味を個性化しているということである。こうした「だけ」の有する諸種の個別的意味に共通している点は何かという点、叙述対象である事物の範囲をある限度で切り、その限度までの部分のみを取り出し、対象にすえ、問題とする意識である。当然その裏には、掲げられた限界点以上の部分は切り捨て、「それ以上は違うが」と否定する意識がある。「だけ」の中心意義は〈限定〉である。それが前後の意味関係によっては〈限定〉となり〈程度〉となる。確かに一般の辞書や文法書の類では、「だけ」をこのように2大分しているのであるが、前者は主語に立ち得、後者は立ちにくいという文法的特徴の認められるものの、意味的には別類とすべき理由は見当たらない。「限定されたある範囲に相当する 度合い」という意味で〈程度〉もまた〈限定〉の一部と言わなければならない。中心意義たる〈限定〉に〈程度〉なり〈強調〉なり、あるいは〈比例〉といった意味あいが付加されてくるのは、「だけ」の置かれた文脈によって加味される2次的意味と見るべきである。「ばかり」や「ぐらい、ほど」への置き換えの可否も、けっきょくはそうした文脈の共通性・非共通性に由来する。「だけ」の意味分類への1つのめやすとなるはずである。

筆者は前稿「『ぐらい、ほど、ばかり』の用法」において、文脈が語の個別的意味を規定するとの見地に立って、それら3語の意味分類を試みた。本論では、「だけ」を前稿「ばかり」の意味分類と対比対応させながら、同一方式により分類してみた。

(付記) ある語のその文脈における個別的意味を、まず先行語によって大きく分け、次に後続叙述によって下位分類していく。この分類系統図の流れを上から順次たどることにより、いかなる場合の用法も、その個別的意味がびたりと探り当てられるというのが最も望ましい分類法であるが、現段階では、そのような分類法は求むべくもない。今後の研究課題であることを記しておく。



